

畑中良輔 ● Ryoosuke Hatanaka

推薦 「神戸演奏協会」を文化的事業の頂点として、神戸を拠点とする「神戸市内合唱団」と「神戸市混声合唱団」の2団体、国際都市神戸の音楽文化の高さの中に充実した活動を展開している。一時はこの両団体でオペラ公演を行なっていたが、阪神災害のあと現在オペラ公演が企画されないのは残念である。

「神戸市混声合唱団」は、厳格な能力テストを通過した若い声楽家の集団であり、声楽（ことにアンサンブル能力）に関する要求に対応できる4、50名の精鋭揃いである。東京公演も毎年行ない、「東の東京混声合唱団、西の神戸市混声合唱団」とも呼ばれる。定期公演は常に完売という実績をあげている。

今回の一枚は、東京から宇野功芳を迎えた異色のプログラム。常に個性的な彼でなければこうした表現はできないだろう、と思われような、音楽表出の独自性が期待された。最初は佐藤眞の名作《旅》。最近こうした合唱名曲の古典が忘れられようとしているが、ナイーヴでみずみずしい旅への誘いをストーリーに描いた佐藤の初期名作が、このところあまり顧みられなかった新鮮な感動にわれわれを誘うことに改めて気付かされた。それに宇野の何ともスナオなこと!! 宇野流のオドロキよりもこのスナオさにおどろいた。何よりも合唱団各パートの練りが緻密で、バランスが良い。この点《水のいのち》にはもう少し（宇野流の）ドラマが欲しかった。石桁眞礼生作品もオドロキだ。



■神戸市混声合唱団 / 特別演奏会

①佐藤眞：混声合唱のための組曲《旅》②高田三郎：混声合唱組曲《水のいのち》③大中恩：沼④同：海の若者⑤同：秋の女よ⑥石桁眞礼生：月光とピエロ
宇野功芳指揮 神戸市混声合唱団、沢田真智子、宮下恵美(p)
[コウベレックス©KPC619] ¥2000

石田善之 ● Yoshiyuki Ishida

録音評 各パート間のまとまりや響きのよさが伝わり、コーラスの響きも美しい。2011年6月5日の神戸文化ホール中ホールでの演奏会の収録のため、聴衆の距離感など忠実性を感じさせるが、伴奏のピアノはやや近めに聴かせている。〈90〉

うねりの表現も抜群。それは「沼」の微細な流動にじっと耳を傾けさせる「静謐の力」は俗に言う「癒し」を超える自然とのすがすがしい一体感に導いてくれる。久々に純な感動を呼ぶ演奏だ。

推薦 喜多尾道冬 ● Michifuyu Kitao
「奥の細道」が思い浮かぶところ、このCDの佐藤眞による《旅》の世界は抽象性がまざる。しかし演奏は「旅」の本質に鋭くふれる。冒頭の《旅立つ日》のすがすがしい高揚感！旅はこのようにさわやかな風に髪をなぶられる心のときめきからはじまるはず。つづく第2曲の《村の小径で》は第1曲と対比をなす落ちついたテンポ感覚がすばらしい。小径の微細な情景が親しみ深く眼に入ってきて、それらの静寂なたたずまいに耳が引きつけられる。その抑制のきいた表現はこの演奏の美質のひとつをなす。第3曲の夢想の広がる空気の表現もすばらしい。第4曲《なぎさを歩めば》での深い内省は砂地を踏みしめるフィジカルな感触から生まれる。その感触のリアルなつかみ方！旅の果ての疲れのなかに癒しと悟りが見つかるところ。そこからふたたび旅する元気が湧いてくる。その再生力の表現もみごとだ。

《水のいのち》の第1曲《雨》で降りしきる雨の自然な表現と、その音に耳を引き寄せられ、雨と一体化する深い自足感に類はない。また《海》のおだやかな表面の下でたえず流動する水の